

冬越しの準備

■生物は巣穴の中へ

今回も、工事のため七北田川河口の調査はできなかった。気温が下がり、干潟の表面では生物の姿は見られない。しかしカニの摂餌した跡はあり (Fig.1), 気温が上がったときなどは巣穴から出て餌をとっていると思われる。

アシハラガニは巣穴の中にいるのが観察され (Fig.2), 冬を越す準備に入っていると考えられる。

転石の下では、カワザンショウガイが観察された (Fig.3)。場所はFig.4の赤枠で囲んだ部分である。昨年は日和山の東側にある転石の下で観察されたが (レポートNo. 155参照), 現在その場所は乾燥化が進み生息は確認できなかった。2011年の震災での沈降後、宮城県沿岸は隆起が進んでおり、その影響で生物の生息場所も変化していると思われる。



(Fig.1 カニの摂餌跡)



(Fig.4 カワザンショウガイ生息場所)



(Fig.2 巣穴内のアシハラガニ)

■ガザミの死骸

Fig.5は潟湖内に漂着していたガザミの死骸である。今回の調査では2個体確認した。震災後、津波の引き波が泥を沿岸海底に運んだことにより、ガザミの越冬環境が好転した。そのため、宮城県沿岸はガザミの漁獲量が急増している (レポートNo. 173参照)。

ガザミの寿命は2~3年と考えられており、生涯を終えたガザミの死骸も数多くなるのであろう。



(Fig.3 カワザンショウガイ)

(Fig.5 ガザミの死骸)

(佐藤 賢治)